

# 不登校児童生徒への支援に対する具体例 文部科学省資料等から要約

## <不登校観の変遷>

分離不安説（1950年代後半～）

分離不安型 神経症的中核説（1960～1970）

葛藤型 学校病理説（1970～1980）

無気力型 社会病理説（1990～2000）

脱学校型 生き方の問題（2003～）

## <無気力型>

- ・ 登校しないことへの罪悪感が少なく、迎えに行ったり強く催促したりすると登校することもあるが長続きしない。
- ・ 楽しい行事のある時は登校したり、友達が誘えば登校したりすることもある。
- ・ 家ではゲームやインターネットなど、自分の好きなことをして過ごすことが多い。
- ・ 主体性を持って行動することがなく、課題に対して自ら積極的に取り組もうとする意欲がない。「めんどろ」「疲れる」ということを言うようになり、元気がなくなり無気力化していく。
- ・ 「勉強が分からない」「学校が面白くない」「嫌な友達がいる」など、何か理由をつけて休もうとするが、明確な原因が見当たらない。
- ・ 友達が誘えば登校したり、学校の先生の訪問に応えたりすることもある。
- ・ 登校刺激をしなければ家族と和やかに過ごすことができる。
- ・ 登校するために様々な条件を付けるが、それに応えても、登校は長続きしない。

○無気力感の原因を明確に意識しているわけではないので、理由をしつこく聞くことは避ける。

○興味や関心のあることを話題にするなかで、今困っていることを聞き、親も共感する姿勢で望むようにする。

○親や先生が、子供のころ失敗したり、悩んだりした話などをして、生きていくことは失敗の連続であることを伝えていく。そして、それを周りの人の力を借りながら、一つ一つ乗り越えていくことが大切であることも伝えていく。

・さらに生活のリズムが崩れ、昼夜逆転状態となる。

・学校には行かないなどと自分から意思表示をするようになる。

・学校の話は避けるようになり、表情も暗く、家族とも必要最低限のことしか話さなくなる。

・特に、登校刺激をする人は避けるようになり、自室に閉じこもる生活となる。

○興味や関心のあることを話題にして、会話を取り戻す。一時、登校刺激を中断することも一法である。

・生活リズムを改善させるための対応として、できるだけ午後 10 時までには就寝させ、朝は、登校時刻の 1 時間以上前には起床させる。担任の先生と相談して、必要最小限の家庭学習をすることも大切である。また、家の仕事をさせ、頑張ったときは、褒め、感謝の気持ちを伝え、少しずつ自己肯定感を高めていく。

- ・やがて、家族との会話が戻り、刺激しなければ、落ち着いて過ごせるようになる。
- ・出席日数や進級のことを気にするようになり、自分から学校のことを話題にするこ  
ともある。学校への復帰には前向きではないが、登校について考えるようになる。
- ・進学のことやフリースクール等のことも考える場合がある。

○少しずつ意欲が出てくるが、その気持ちを後押しするために「これを買ったら学校へ  
行ける？」などと物で釣るような対応は、できるだけ避けたほうがよい。

○本人の小さな意欲を行動につなげるために、親は他人に頼ることなく、主体者となっ  
て、たとえ本人が乗り気でなくても、「私と一緒に学校に行くよ」と登校を支える姿  
勢を明確に伝える。逆に親の姿勢が曖昧であれば、本人の行動は堂々巡りを繰り返  
し、一時登校してもまたすぐに元に戻る。本人が今抱えている問題、進路上の課題に  
ついて一緒に解決していく姿勢を示す。その親の姿勢は、すぐに結果は出なくとも、  
必ずいつか子供に伝わる。

○高校生の場合、出席日数や単位の取得状況、進級の条件等を確認する。

○進級の可能性がある場合は、まだ十分間に合うことを学校から伝えてもらうようにす  
る。進級が難しい場合は親が子供の気持ちに添った上で進路の情報を収集し、一緒に  
学校見学等を行う。

- ・興味をもつことが見つかったり、考え方が前向きに変化したりしてくる。夢を語るこ  
とができるようになる。
- ・家族とじっくり将来のことや学校のことなどを話すことができるようになる。
- ・課題に対して少しずつ取り組もうとする姿勢が出てくる。
- ・保健室、相談室、図書室や教室で一定時間過ごすことができるようになる。

- 本人の課題や目標について一緒に考え、本人の持っている良さを認め励まし、自立を図るための支援をする。
- この時期、スモールステップで目標を立て、取り組ませることは有効であるが、必ずしも継続するわけではないことを周りが理解することが大切である。例えば、過去のケースで、一週間頑張った後、一週間休むこともある。その場合、休むことは充電期間ととらえ、たとえ初期の対応に戻ったとしても、決してそれは後退ではないことを伝え、励ましていく。それが本人の安心感とやる気につながり、次のチャレンジへと進む原動力となる。
- 継続することは大事であるが、継続にこだわるよりも、一時期でもできたことに着目して、励まし褒め、自己肯定感を高めていくが大事である。
- 休む周期が短くなり、学校での生活が定着してくれば、復帰は近いと考えてよい。

\*過去の様々な事例を基に構成しています。必ずしも多様なケースに当てはまるものではありませんが、事例を参考にいただき、想像力を働かせ、新たな取組を生み出し、一日も早い復帰をめざしていただければ幸いです。